

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第852号 平成26年12月16日

## 男らしい男（2）

11月20日付の北海道新聞芸能欄で、映画評論家の佐藤忠男氏が高倉健氏に関して、「本当の男らしさ」と題する一文を寄せています。

佐藤氏はその中で、高倉健氏は「任侠映画の一時的なブームが去った後、その役柄で築いた風格で、大人しく善良な庶民の本当の男らしさを演じるという、文字通りの離れ業をやったのけた。『幸福の黄色いハンカチ』『鉄道員（ぽっぽや）』がそれであり、彼は本当に男らしい男が、実は心優しくつつましい庶民でもあり得るという、すてきな人格のありようを示してくれた」と述べています。

そこで私は、ふと思うのです。一体「男らしい男」というのはどういう人の事をいうのだろうか。

「男らしさ」を象徴するものとして、顎髭や体格、更には腕力といった外形的なものから、決断力、洞察力といった内面的なものまで様々考えられますが、一人の男性を見て「男らしさ」を感じるか否かは、全く個人的な感性の問題だといえます。ただ、その感性は、伝統や文化、歴史等その人の育った環境によって大きな影響を受ける事は間違いありません。

私の父親は一介の労働者でしたが、子どもの頃、黙々と家族のために働く姿を見て、これが男というものの姿であり、自分も、こうしなければならぬと感じたものです。私の「男らしさ」に対する感性は、多分に父親からの影響を受けていると今でも思っています。

メンズリブ東京代表の豊田正義氏は、その著「オトコが『男らしさ』を棄てるとき」の中で、バークレー・メンズ・センターの「男性解放宣言」を掲載しています。その宣言では「僕たちは、不可能で抑圧的な男性像—強くて、寡黙で、冷静で、ハンサムで、非情緒的であり、成功しており、女の主人であり、他の男に対しては指導者であり、富を手にし、頭脳明晰、スポーツ万能、そして重々しさを持つ男—を達成しようと苦悩し、競争し合うことを望まない」と述べられています。

私は、宣言で述べられているような男性に出会ったという経験は、残念ながらありません。そもそも、「強くて、寡黙で、冷静で、ハンサムで、非情緒的で・・・」等という、まるでスーパーマンのような男性は存在するとも思いません。

宣言では「僕たちは、社会から課せられた男の役割に合致した生き方をするように演技することは、男女関係においても、会社関係においても、もうしたくない」と述べています。

私には、ここでいう「社会から課せられた男の役割」というものが何を指しているのか良く分かりませんが、頭の中で膨らませたような理想(?)の男性像に近付くために競争し、苦悩するというのは、無駄な努力というものでしょう。

勿論、「社会から課せられた役割」というものが、社会の構成員として、自立し、責任を持って行動するというような事であるなら、男であれ女であれ、そう行動出来るよう努力するのは当然ではないでしょうか。

ただ、その努力が、必要以上に男である事や女である事を意識して、それらしく演技しようとするなら、そんな演技はいつまでも続けられる筈はありませんし、自分を追いつめ、苦しませるだけだと思います。つまり、人は自然体が一番です。

「幸福の黄色いハンカチ」という映画をご覧になった方は多いと思いますが、この物語は、高倉健氏が演じる元炭鉱夫の島勇作が刑務所を出所した後、ひよんな事から失恋の傷を癒すために旅に出ていた花田哲也(武田鉄矢)と、同じく恋人に裏切られ傷心旅行に来ていた朱美(桃井かおり)の3人で、別れた妻(倍賞千恵子)のいる夕張に向かって旅を続けるというものです。

夕張に近づくに従って島の心は、「やっぱり引き返そう」「どう考えたってあいつが一人ではさすがない」と揺れ、夕張には寄らずに行ってしまうのですが、哲也と朱美の二人が励まし、夕張に送り届けると、そこには沢山の黄色いハンカチを掲げて島の帰りを待っている妻がいたという、実に良く出来た映画です。

高倉健氏が演じる島は、寡黙で、不器用で、しかも最後には優柔不断で、女々しくもあります。でも、その全てを通して、島に男を感じたのは私だけではないでしょう。

このように、「男らしさ」等というものは、所詮はいい加減なものだし、「男らしさ」を殊更に振りかぶって考える必要もないという事だと思います。

それでも、「男らしさ」について書いて申し上げれば、他人に対しても、また、自分に対しても優しい事といえるでしょうか。そして忘れてならない事は、自分らしさを大事にするという事でしょう。もっとも、その優しさも、自分らしさも演技では直ぐに化けの皮が剥がれてしまいますから、内面から滲み出て来るものを大切にしておく必要は、常にあると思っています。(塾頭：吉田 洋一)